大学等名 中村学園大学

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

情報教育委員会

（責任者名） 山本　朋弘　　（役職名） 情報教育委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	令和7年度は履修者数が600名、修了者数は543名（修了率は90.5%）であった。令和6年度の履修者数が559名、修了者数は513名（修了率91.8%）であった。履修者数も修了者数も昨年とほぼ同様であった。 本プログラムはすべてオンデマンド形式で実施している。これまでは、毎回のLMS上の確認テストへの解答を出席としていたが、今年度からはビデオの視聴状況も含めて出席とし着実な受講となるようにした。授業担当者が毎回の受験状況と結果を確認することにより、修得状況を確認している。 未修了者の学修状況を見ると、多くが出席回数不足と期末課題の未提出である。オンデマンド授業であるため、計画的な自己管理が必要であるとシラバスには明記している。今年度は、出席（確認テストの受験）が思わしくない受講者に個別に連絡するようにしたが、残念ながら出席の改善に至らなかった。今後はさらにフォローしていく。
学修成果	毎回の確認テストの結果と期末課題をみると、学修目標に沿った学修成果が得られている。確認テストは何度でも受験可能であり、当初点数が低くても何度か受験し、満点をとる学生が多く見られた。また、授業アンケートの自由記述でも「確認テストが何度も受けられてよかった」、「理解できていない箇所の授業ビデオを繰り返して視聴できてよかった」等が多く、学修成果が得られていることがわかる。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	授業アンケートの「私はこの授業の到達目標とする能力を身に付けることができた」への回答は、「とてもそう思う」「ややそう思う」をあわせて94.7%、「どちらでもない」が4.2%、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」をあわせて0%であり、昨年度とほぼ同様であった。この結果からも、学生の理解度が高いと判断できる。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	授業アンケートには、該当する質問を設けていないが、「私は総合的にこの授業を次のように評価する」への回答が、「非常に良い」「良い」をあわせて89.4%、「普通」が9.8%、「少し改善してほしい」「改善してほしい」をあわせて0.8%であり、昨年度とほぼ同様であった。この結果からも、後輩等他の学生への推奨度は高いと考えられる。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	入学後の新入生オリエンテーションの際に、データサイエンスを学ぶ必要性を説明し、履修を促している。また時間割上は、特定の曜日時限に配置されるが、オンデマンド方式により学習可能なことのシラバス等での通知を継続していく。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは教養科目として実施しており、受講者の多くが1年、2年生であるため、修了者の進路や活躍状況については把握していない。卒業生と卒業生の就職先企業に対するアンケートは毎年実施しているので、今後プログラム修了者の活躍状況や評価を実施するために、具体的にアンケート項目を検討していく。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	現時点では、産業界からの意見を収集していないが、前項のように、就職先企業へのアンケートは毎年実施しているので、今後の調査項目にいれるために具体的にアンケート項目を検討していく。
数理・データサイエンス・ＡＩを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	受講者の関心分野を題材にすることにより、学ぶ楽しさを理解するように努めている。たとえば、「コサイン類似度」の説明では、小麦粉を材料とする食品を題材にして、実際に似ていると感じる食品と数学的に求めた値が一致することを確認するようにしている。また、受講者の学部が栄養科学部、教育学部、流通科学部とさまざまであることから、生活に馴染みのある例を挙げるようにしている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	令和7年度から受講者の多くが教科「情報」を履修してきたので、高等学校までの内容と重複しないよう、かつあまり高度になりすぎないよう授業内容を一部改版した。本学では令和8年度から100分授業を採用し授業回数も少なくなるので、これを機にさらに授業内容を見直す予定である。

大学等名　中村学園大学短期大学部

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

情報教育委員会

（責任者名）山本　朋弘　　（役職名）情報教育委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	令和7年度は履修者数が158名、修了者数は131名（修了率は82.9%）であった。令和6年度の履修者数が236名、修了者数は205名（修了率86.9%）であった。令和6年度と比較すると履修者数も修了者数も減少し、修了率も低くなっている。令和5年度は今年度とほぼ同様だったので、今後増減の原因を調査することにする。 本プログラムはすべてオンデマンド形式で実施している。これまでは、毎回のLMS上の確認テストへの解答を出席としていたが、今年度からはビデオの視聴状況も含めて出席とし着実な受講となるようにした。授業担当者が毎回の受験状況と結果を確認することにより、修得状況を確認している。 未修了者の学修状況を見ると、多くが出席回数不足と期末課題の未提出である。オンデマンド授業であるため、計画的な自己管理が必要であるとシラバスには明記している。今年度は、出席（確認テストの受験）が思わしくない受講者に個別に連絡するようにしたが、残念ながら出席の改善に至らなかった。今後はさらにフォローしていく。
学修成果	毎回の確認テストの結果と期末課題をみると、学修目標に沿った学修成果が得られている。確認テストは何度でも受験可能であり、当初点数が低くても何度か受験し、満点をとる学生が多く見られた。また、授業アンケートの自由記述でも「確認テストが何度も受けられてよかった」、「理解できていない箇所の授業ビデオを繰り返して視聴できてよかった」等が多く、学修成果が得られていることがわかる。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	授業アンケートの「私はこの授業の到達目標とする能力を身に付けることができた」への回答は、「とてもそう思う」「ややそう思う」をあわせて94.2%、「どちらでもない」が4.3%、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」をあわせて0%であった。昨年度はそれぞれ85.2%、12.2%、0%であったことから、修了率は昨年度よりも下がったものの受講者による自己評価では、学生の理解度が高いと判断できる。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	授業アンケートには、該当する質問を設けていないが、「私は総合的にこの授業を次のように評価する」への回答が、「非常に良い」「良い」をあわせて92.8%、「普通」が7.2%、「少し改善してほしい」「改善してほしい」をあわせて0%であった。昨年度はそれぞれ82.6%、16.5%、0.9%であったことから、修了率は昨年度よりも下がったものの後輩等他の学生への推奨度は高いと考えられる。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	入学後の新入生オリエンテーションの際に、データサイエンスを学ぶ必要性を説明し、履修を促している。また時間割上は、特定の曜日時限に配置されるが、オンデマンド方式により学習可能なことのシラバス等での通知を継続していく。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	修了者の進路や活躍状況については把握していない。卒業生と卒業生の就職先企業に対するアンケートは毎年実施しているので、今後プログラム修了者の活躍状況や評価を実施するために、具体的にアンケート項目を検討していく。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	現時点では、産業界からの意見を収集していないが、前項のように、就職先企業へのアンケートは毎年実施しているので、今後の調査項目にいれるために具体的にアンケート項目を検討していく。
数理・データサイエンス・ＡＩを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	受講者の関心分野を題材にすることにより、学ぶ楽しさを理解するように努めている。たとえば、「コサイン類似度」の説明では、小麦粉を材料とする食品を題材にして、実際に似ていると感じる食品と数学的に求めた値が一致することを確認するようにしている。また、受講者の学部が食物栄養学科 、キャリア開発学科、幼児保育学科とさまざまであることから、生活に馴染みのある例を挙げるようにしている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	令和7年度から受講者の多くが教科「情報」を履修してきたので、高等学校までの内容と重複しないよう、かつあまり高度になりすぎないよう授業内容を一部改版した。本学では令和8年度から100分授業を採用し授業回数も少なくなるので、これを機にさらに授業内容を見直す予定である。